

農学はいま、持続可能な社会の実現に欠かせない実践学となっています。

ここではインタビューを通じて、農学生命科学研究科に学ぶ現役学生と、
弥生キャンパスを巣立った先輩たちのいまをご紹介します。

ON THE CAMPUS



しが たかのり
志賀崇徳 Takanori Shiga

獣医病理学研究室 2016年博士課程進学

もともと父が獣医をしていて、僕は長男で一人っ子。なのであとつぎになるのが決まっていたんです。それがイヤで、あるとき父に「キノコの研究者になりたい」と言ったら大反対されました。それでもがんばっていると、とうとうむこうが折れて「東大に受かったら認める」ということになりました。その年は浪人しましたが、翌年無事合格。キノコ熱は冷めてしまい、いまは動物の筋肉の病気を研究しています。この前、筋硬直性ジストロフィーというヒトの病気がイヌにもあることを見つけました。これは新発見です。イヌが幼犬から成犬になるにつれDNAを納めた核が筋肉中を移動していくのですが、それが異常な位置にとどまると病気になります。これからそのメカニズムを解明したいと思っています。



てらもと なおみ
寺本奈保美

Naomi Teramoto

獣医生理学研究室
2016年博士課程進学

高校時代は理科が好きで物理、化学、生物を勉強しました。東大に入って物理と化学を選択したんですけど、まわりがあまりに凄すぎて、新天地を求めて生物の方にやってきました。獣医生理学研究室は正解だったと思っています。たとえばゲノム編集など、普通なら経験できないことが経験できます。ヒトとの類似性を持ったさまざまな実験動物を使って遺伝子の変異と体調の変化との関連性を調べるんです。こんなこと医学部でもできません。医学部では使える実験動物はマウスですが、獣医学は研究に合わせていろいろな実験動物を選ぶことができます。あまり成果、成果と急かされることもなく、じっくり、ゆっくりと自分の研究を進めることができます。

研究者になりたい

イヌの
筋硬直性
ジストロフィー
を新発見

なぜ獣医学を選んだの？

Why have you chosen the Department of Veterinary Medical Science?

ゲノム編集で、
遺伝子の変異と
体調変化の
関連性を調べる

いろいろな
動物の向こうに
ヒトがいる

ヒトは体内で
アミロイドを
分解も代謝も
できない

普通なら
経験できないことを
経験できる



うしお ななこ
潮奈々子 Nanako Ushio

獣医病理学研究室 2016年博士課程進学

最初は地球生態系を研究しようと思って早稲田に入学しました。でも、そのとき身近な人が病気になってしまって…。狂牛病のようなタンパクの異常の病気です。タンパクが異常を起こし線維化したものをアミロイドというのですが、体内にそれができるとヒトはそれを分解も代謝もできないんです。でも調べてみると、じつは蜘蛛や蚕のような昆虫はアミロイドを制御して利用していることがわかりました。そのとき思ったんです、この病気の治療研究が進んでいないのは、比較生物学的な視点が足りないからではないかって。獣医病理学研究室に来たのは、それが理由です。動物とヒトの違いを比べてみることで、きっと新しい発見があるはず。医学部ではヒトが中心ですが、獣医学ではいろんな動物がいて、その向こうにヒトがいます。



詳しくは、東京大学 農学生命科学研究科 獣医学専攻
<http://www.vm.a.u-tokyo.ac.jp/>